

## 木村素衛に関する文献・資料目録 (下)

大 西 正 倫

〔抄 録〕

本目録は、日本のオリジナルな教育哲学者、木村素衛<sup>もともり</sup>（1895–1946）に関する文献・資料について、できるかぎり網羅し、事実関係を確定する試みの、後半部である。

キーワード ドイツ観念論の超克，美，表現，文化，教育

本目録全体は下記の項目から成っている。今回は、後半部として、ⅢからⅥを掲載する。

- I 木村素衛 出版物（翻訳・著書）
- II 木村素衛 論文
- III 木村素衛 随筆・短文
- IV 木村素衛 講演筆記
- V 京都帝國大学における講義題目
- VI 木村素衛に関するもの

- ①以下に挙げる文献・資料は、現時点までに筆者の知りえたものに限られ、未確認の事項も含まれている。それらについては、未確認・未詳・未見などと注記した。なお、下線部<sup>~~~~~</sup>は、不明ないし誤りであることを示す。
- ②とくに随筆・随想については、今回の整理は一部にとどまる。（短文・雑文も含めれば、散逸したものも数多くあるものと思われる。）また、日記についても、当然のことながら、すべてが公開されているわけではなく、しかも公刊されているものそれぞれのあいだに期間の空白がある。書簡類はほとんど活字になっていない。
- ③表記については、それぞれの原典に即し、また印字可能な限り、本字(旧字)を用いた。（素衛と素衛<sup>ゝ</sup>、「就て」と「就いて」と「ついて」、「於て」と「於いて」と「おいて」の使い分け等は原典にならった。）
- ④これまでにご遺族をはじめ多くの方々から有形無形のご支援・ご協力を賜わってきた。各位に感謝申し上げたい。
- ⑤今回の整理は暫定的なものにとどまる。不備・不明の点、誤りや遺漏について、お気づきの方、ご存知のむきは、是非ご教示下さるようお願い申し上げます。（m-onishi@bukkyo-u.ac.jp）

### Ⅲ 木村素衛 随筆・短文

「廣嶋の春」1932(昭和7)年4月。

『街道』~~~~~

(昭和7年12月31日の日記(『紅い實と青い實』に所収)を参照)

『草刈籠』1942(昭和17)年3月。

『草刈籠 随筆集』(信濃教育会版)1966(昭和41)年11月に再録。(以下、省略。)

「一つの視角度から」1932(昭和7)年〃月。(昭和7年12月31日の日記(『紅い實と青い實』に所収)を参照)

『精神科学』昭和7年第4巻——中等教育研究號——, 1932(昭和7)年10月17日。

「中等教育の問題シムポジウム」の欄に収録。

「藤の花の散る頃」1932(昭和7)年11月9日。(同日付けの追記あり。)

『精神科学』昭和8年第1巻, 1933(昭和8)年1月。(上述の日記には「正月號」と。)

昭和16年8月の追記に付け替えられて『草刈籠』1942(昭和17)年3月に収録。

☆『草刈籠』のp.156には「昭和七・二・九」という日付が印刷されているが、おそらく、縦書き漢数字「一一」を「二」と見誤ったものと思われる。信濃教育会版の『草刈籠 随筆集』も、これを踏襲している。

「ぼんたん」1932(昭和7)年12月5日。(12月5日の日記に「今日街道の為に『ぼんたん』と云ふ原稿を送つた。」とある。)

『街道』昭和8年正月号。(筆者は未見)

『草刈籠』1942(昭和17)年3月。

「ナンセンスの辯證法」1932(昭和7)年〃月。(筆者は未見)

\*同年12月31日の日記には「学校の新聞」に載せたとある。

「廣嶋とそして第三樂章」1932(昭和7)年〃月。(筆者は未見)

\*同年12月31日の日記には「学校の新聞」に載せたとある。

「秋と夕顔」1938(昭和13)年1月4日。

『思想』第189号, 1938(昭和13)年2月。

『草刈籠』1942(昭和17)年3月。

「どくだみの芽」1938(昭和13)年11月20日。

<sup>でん</sup>田可六編『子供の目と耳』(内外出版印刷株, 1938(昭和13)年12月1日)の序文として。

『草刈籠』1942(昭和17)年3月。

☆『草刈籠』のp.168には「昭和一三・二・二〇」という日付が印刷されているが、おそらく、縦書き漢数字「一一」を「二」と見誤ったものと思われる。信濃教育会版の『草刈籠 随筆集』および『慈愛と信頼』も、これを踏襲している。

「殺生」1939(昭和14)年12月1日。

『思想』第212号, 1940(昭和15)年1月。

『草刈籠』1942(昭和17)年3月。

「藝術の思ひ出」1940(昭和15)年8月10日。(『草刈籠』に記載の脱稿日)

河合榮治郎編著『學生と藝術』日本評論社, 1940(昭和15)年11月。

→『草刈籠』1942(昭和17)年3月。

「學童出動」1945(昭和20)年1月8日。

『信濃教育』第698号, 1945(昭和20)年2月。

「縫針」1945(昭和20)年9月2日。

『思想』第270号〈西田博士追悼号〉昭和20年10月号, 1945(昭和20)年11月15日発行。

『隨想集 雪解』1947(昭和22)年2月。

『草刈籠 隨筆集』(信濃教育会版) 1966(昭和41)年11月に再録。

「遺された友情の使命」1945(昭和20)年(?)月日。 (筆者は未見)

東大新聞 (正しくは『東京帝國大学新聞』か?) 1945(昭和20)年月日。

※谷 昌恒『教育力の原点』(岩波書店, 1996)の「あとがき」pp.258-259を参照。

「二尊院」1945(昭和20)年12月5日。

『信濃教育』第709号, 1946(昭和21)年1月。

『隨想集 雪解』1947(昭和22)年2月。

『草刈籠 隨筆集』(信濃教育会版) 1966(昭和41)年11月に再録。

(遺稿)「西田幾多郎先生の話」 (後記: 下村寅太郎)

『心』第17巻第11号, 平凡社, 1964(昭和39)年11月。

## 〔その他〕

鈴木藤太郎<sup>とう</sup>著『子供記』(甲文社, 初版は「昭和16年ころ」(吉岡正幸氏)。『改訂 子供記』は1948(昭和23)年10月15日)への序文。昭和16年1月。

(『日本教育新聞』京都版, 1992(平成4)年1月11日も参照)

後藤三郎<sup>こう</sup>著 詩集『孤擢』惇信堂, 1949(昭和24)年4月20日に, 序として, 木村素衛から後藤秀雄氏(三郎の父君)宛の手紙(1946(昭和21)年1月19日付け)が収められている。

☆ただし, この手紙は正しくはおそらく1945(昭和20)年の同日付けのものであろう。

昭和20年3月1日の日記に同年1月19日に上京した旨の記載があり, その手紙の内容と合致する。(筆者の問合せに対する ご令嬢<sup>ちよう</sup> 張<sup>さつき</sup> 皐<sup>さつき</sup>様からのご教示。)

この書物は, 氏の50回忌にちなみ, 新たに日記「信濃路の手記」を加えて, 再刊された。

後藤三郎『孤擢・信濃路の手記——若き戦没学徒の遺稿——』(株)国際評論社出版事業部,

1995(平成7)年9月15日。

\* 鈴木藤太郎と『子供記』ならびに後藤三郎と『孤擢』については, 張さつき『父・木村素衛からの贈りもの』(後掲) pp.136-137およびpp.147-149を参照。

〔学校教科書に取り上げられたもの〕

「美和子と明彦」：『紅い實と青い實』より、昭和7年12月9日の日記の全文、および『花と死と運命』より、昭和10年7月19日および同年8月25日の全文。

武田祐吉・久松潜一・吉田精一編『高等学校 現代国語 一』角川書店、昭和37年4月20日 文部省検定済、「日記と手紙」という項目に掲載。

「花と運命」：『花と死と運命』より、昭和12年4月21日および昭和11年5月29日の日記のそれぞれを抄録し、構成したもの。

高田瑞穂・阪倉篤義編『現代国語 三』（高等学校第三学年用）東京書籍、昭和49年4月10日 文部省検定済、「随想」の項目に掲載。

Ⅳ 木村素衛 講演筆記（『』を付したものは、活字印刷されて冊子となったもの）

- 1 『アポロギアを中心に』昭和6年3月28～30日、上田市北校における講義。（本文未見）

印刷・発行の主体・日付は未詳。宮下哲之助氏（『上小教育』86号）によれば、上田市北校における「哲学講習会」。また、「北校でのこの講演がきっかけとなって上小哲学会が発足したものと思われます。」なお、昭和6年5月11日の日記（『紅い實と青い實』に所収）には、この時の講義について「アポロギアを中心に希臘史をプラトン迄」とある。

- 2 『認識と實在』昭和7年1月8～10日、上小哲学会における講義。校閲済み。昭和8年7月30日発行。（本文未見）

- 3 『最近の西田哲学に於ける「歴史的・自然」の概念』昭和12年6月30日、伊那富小学校読書会における講義（西田幾多郎の論文「論理と生命」について）。昭和12年10月発行。

『慈愛と信頼』p.101では講義の時期が「8月」となっていた。『木村素衛先生と信州』p.127では「6月30日」に直されているが、「上伊那伊那富小学校」となっていて、「読書会」の文字は消えている。いずれにも、講題に「の概念」という文言はない。  
この冊子における註や追記は木村自身が書いたものと思われる。したがって、この筆録は校閲を経たものと推測される。

- 4 『「獨逸國民に告ぐ」に就いて』昭和13年7月2・3日、松本市教育会における講演。  
校閲済み。発行所 松本市教育会、昭和14年3月20日。（本文未見）

- 5 「教育愛に就いて」昭和13年7月11日、松本女子師範学校附属小学校での講演。

＊校閲を経て、『信濃教育』623号、1938(昭和13)年9月に掲載。

「教育愛に就いて ―エロスとアガペ―」として、『木村素衛先生と信州』に再録。

☆なお『慈愛と信頼』p.102では、演題が「エロスとアガペ」となっていたが、『信濃教育』1305号、p.89では「教育愛に就いて」と改められている。同号の宇治橋克彦氏の論文（後掲）を参照。『木村素衛先生と信州』p.127では、再び「エロスとアガペ」となっている。

- 6 『西田幾多郎著―哲学の根本問題 形而上學序論』昭和15年1月11・12日、上伊那哲学会における講義。校閲済み。昭和16年3月20日発行。（本文未見）

- 7 『教育と文化 上』昭和15年2月15・16日、高遠学校における講演。

上伊那郡東部教育会発行。（発行日未詳）（「下」の存在についても未詳）（本文未見）

- 8 「『文化の哲学と教育の哲学』を読むに當つて」昭和18年11月21・22日，長野師範附屬國民學校。『恩師への追慕』信濃教育会出版部，1948(昭和23)年6月12日に掲載。(本文未見)

※演題は『恩師への追慕』の目次による。『慈愛と信頼』p.104，『信濃教育』1305号，p.90，および『木村素衛先生と信州』p.129では，「文化の哲学と教育の哲学」となっている。(郷田p.65も参照)

- 9 「表現愛」昭和20年6月24・25日(?)，下伊那郡伊賀良國民學校に於ける講演。

『信濃教育』711・712号，1946(昭和21)年3月・4月に

「表現愛(一)」・「表現愛(二)」として掲載。

☆同誌711号の同項の末尾に「下伊那伊賀良國民學校に於ける講演筆記」との付記あり。

「入信年譜」と照合すれば，講演日は昭和20年6月24・25日と推定される。

※『表現愛の構造』として昭和22年に単行本化された。※本目録(上)を参照。

- 10 「恩師への追慕」昭和20年7月25日，温明國民學校での西田先生への追慕の講演。

『恩師への追慕』信濃教育会出版部，1948(昭和23)年6月12日に掲載。(郷田p.65)

- 11 「戦後の教育について」昭和20年9月19日，大町國民學校での講演。

『恩師への追慕』信濃教育会出版部，1948(昭和23)年6月12日に掲載。(郷田p.65)

『木村素衛先生遺稿 戦後の教育について』南安曇郡教育会，1969(昭和44)年6月1日。

- 12 「科学教育」昭和20年9月20日，大町國民學校での講演。

『恩師への追慕』信濃教育会出版部，1948(昭和23)年6月12日に掲載。(郷田p.65)

- 13 「教育愛について(表現愛補遺)」昭和20年10月28日(?)。

『信濃教育』722号，1947(昭和22)年2月に収録。

☆同号の「編輯後記」によれば「先生の本縣に於ける最後のご講演」とある。

「入信年譜」と照合すれば，昭和20年10月28日，木曾北部職員会での講演か？

「教育愛」と改題の上，『教育学の根本問題』黎明書房，1947(昭和22)年初版および

1949(昭和24)年増補再版に収録。

信濃教育会出版部からの『表現愛と教育愛』1965(昭和40)年に再録，

同じく『教育学の根本問題』1976(昭和51)年，

さらに『慈愛と信頼』1995(平成7)年にも再録。

- 14 「教育の本質と學校教師」昭和21年1月26・27・28・29・30日ころ。

※著書『教育学の根本問題』の附録についての筆者注記(本目録(上))を参照。

※信州における講演・講義の演題については，『慈愛と信頼』および『信濃教育』1305号(後掲)に所収の「木村素衛入信年譜」，そして『木村素衛先生と信州』の「木村素衛先生略年譜・信州での足跡」に整理されている。

☆それらの内容が文字化されたものとしては，筆者が把握できた上掲のもの以外にも，いくつかあるのではないかと。吉岡正幸氏のご教示によれば，『満州・支那の旅』昭和17年11月23日，

長野附属国民学校における講演は、謄写版印刷して配布された模様。（『慈愛と信頼』p.103および『木村素衛先生と信州』p.129では、「支那視察に関するお話」となっている。）

- ※ 国民学校とは、1941(昭和16)年3月1日の国民学校令によって小学校が改称され、同年4月1日より国民学校として発足したもの。従来の教科を国民・理数・体錬・芸能・実業の5教科に分類した。1947(昭和22)年4月1日より新学制による小学校として再出発する。

『慈愛と信頼』pp.103-106および『信濃教育』1305号pp.90-91では、上記の期間中の記事にも「長野附属こ学校」とある。『木村素衛先生と信州』pp.128-131では附属「国民学校」と訂正された。

以上Ⅱ・Ⅲ・Ⅳのうち『信濃教育』（信濃教育會，時期によっては大日本教育會長野縣支部）に初出のものを抜き出しておけば、以下の通りである。

623号，昭和13年9月，「教育愛に就いて」（講演筆記：校閲済）

650号，昭和15年12月，「アマテュアに就て」（—15・10・18—の日付あり）（随想的小論文）

698号，昭和20年2月，「學童出動」（昭和20・1・8の日付あり）（短文）

709号，昭和21年1月，「二尊院」（昭和20年12月5日の日付あり）（随筆）

711号，昭和21年3月，「表現愛（一）」

712号，昭和21年4月，「表現愛（二）」

）（講演筆記）

722号，昭和22年2月，「教育愛について（表現愛補遺）」（講演筆記）

（同号の目次では、括弧書き副題がついていない。）

※ 『信濃教育』には、復刻版がある。

信濃教育會編著『雑誌 信濃教育』（株）国書刊行会，1993(平成5)年10月20日。

同じく、『思想』（岩波書店）に掲載されたものは以下の通り。

39号，大正14年1月，「含蓄から顯現へ」

52号，大正15年2月，「カントに於ける具體的普遍」

76号，昭和3年2月

77号，昭和3年3月

）「観ることと作ること  
——カント美學に關する一考察」

113号，昭和6年10月，「ヘーゲルに於ける藝術美のイデー」

134号，昭和8年7月，「制作作用の辯證法」

151号，昭和9年12月，「フィヒテの知識學の本質」

189号，昭和13年2月，「秋と夕顔」（随筆）

200号，昭和14年1月，「表現愛の構造」

212号，昭和15年1月，「殺生」（随筆）

270号，昭和20年10月，「縫針」（随筆）

その他，1942(昭和17)年6月10日の日記（「夕映」信濃教育會版『花と死と運命』p.245）に，

『科学思潮』六月号の「巻頭に湯川秀樹君と私との対談がのつている。」とある。（筆者未見）

## V 京都帝国大学における講義題目

(前田論文、『花と死と運命 日記抄』に所収の年譜、『哲學研究』等を参照した。)

1933(昭和8)年〔5月11日、京都帝国大学助教授に任ぜられ、文学部勤務を命ぜられる〕

〈特殊講義〉「人間學としてのフィヒテ哲學」(前田)

(『哲學研究』第206号, 第18巻第5冊, p.119では、カナ書きでなくFichteとなっている。)

〈演習〉 シラーの『美的教育』の原書講読

(後掲の『父・木村素衛からの贈りもの』p.117による。ただし、『哲學研究』にはこの記載はない。制度外の私的な輪読会か? この件については昭和14年の項も参照。つまり演習を担当するのは昭和14年以降である。)

1934(昭和9)年〔呼吸器疾患のため、二ヵ年休講〕(昭和9年2月, 健康を害する。『独逸』序p.2)

特殊講義の題目は「(前學年の續き)」として上と同じものが掲げられていた模様。

『哲學研究』第217号, 第19巻第4冊, p.94を参照。(ただし今度は「フィヒテ」とカナになっている。)

1935(昭和10)年

〈特殊講義〉「文化教育學の基礎的研究としての人間學的構造論」(前田p.44を参照)

＊実施はされなかったものと思われる。

(昭和11年3月23日の日記(『花と死と運命』所収)には「もう間もなくどうあつても公務につかねばならぬ状勢」「これ以上休講を續ける事は、とうてい男として出来ない。」同年4月17日には「五月中旬よりは登校して授業する外なかるべし。」とある。)

1936(昭和11)年

〈講読〉 Kant: *Pädagogik* (「一學期以来」)

〈講義〉「人文主義と文化主義」(10月以降)

＊昭和11年9月12日の日記(「この十月から学校の特殊講義にやらうと思つてゐる『人文主義と文化主義』と云ふ計画」)(南窓社版『表現愛』あとがきp.249, こぶし書房版p.206), および同年10月5日の日記(「今日から私は本年度の講義を初める。一學期以來カントの *Pädagogik* を講讀していたが、今日から一時間を讀みに、他の一時間を講義にした。一時から三時迄。『人文主義と文化主義』と云ふ題。」)(『花と死と運命』に所収, 前田論文p.44にも引用)を参照。

☆おそらく制度上は〈特殊講義〉という一つの科目であつたものを、実際の運営上において〈講読〉と〈講義〉とに分けたものであろう。『哲學研究』241, 21-4, p.116には、「特殊」(講義)として、上の「人文主義と文化主義」が掲げられている。

1937(昭和12)年

〈特殊講義〉「實踐の場の構造と教育的愛」

1938(昭和13)年〔この年以降、特殊講義のほかに普通講義をも受けもつ〕

〈普通講義〉「教育學序説」

〈特殊講義〉「意志と愛」



1939(昭和14)年〔3月31日、教育學教授法講座担任を命ぜられ、

この年以降、普通講義・特殊講義・演習を担当〕

〈普通講義〉「教育學序説」（題目は前年度と同じ。次年度以降も継続。以下、記載を省略。）

〈特殊講義〉「自覺に於ける内在と超越（人間育成の本質的意義）」

〈演習〉 フィヒテ『學徒の使命』（前田）

Fichte: *Einige Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten*

（『哲學研究』277, 24-4, p.122）

1940(昭和15)年〔3月13日、文学博士の学位受領。

3月30日、京都帝国大学教授に任ぜられる〕

〈特殊講義〉「文化交流の諸問題」

〈演習〉 Hegel: *Die Vernunft in der Geschichte*（昭和18年半ばまで：前田）

（『哲學研究』290, 25-5, p.91も参照）（以下、記載を省略。）

1941(昭和16)年

〈特殊講義〉「國家と文化と教育」

1942(昭和17)年〔6月30日、心理学講座担任を命ぜられる〕

〈特殊講義〉「人間形成理念の問題史的発展 個人主義から理想主義へ」（副題は前田）

〈講読〉 デイルタイの心理学論文（前田）

＊『哲學研究』314, 27-5, pp.104-105には、〈演習〉（ヘーゲル）の記載はあったが、

〈特殊講義〉の副題と、〈講読〉（デイルタイ）の記載はなかった。デイルタイの講読は、心理学講座のものと考えられる。これに関しては、次を参照。

1943(昭和18)年10月～1944(昭和19)年9月（期間と題目の表記は『哲學研究』第334号, p.82による。）

〈特殊講義〉「人間形成理念の問題史的発展 理想主義より國民主義へ」

☆前田p.52のいう「理想主義から國民主義へ」は、この期間に相当するものと思われる。

〈演習〉 「近世に於ける國家思想の諸問題」（昭和18年秋以降：前田）

心理学講座の〈演習〉として、Dilthey: *Ideen über eine beschreibende*

*und zergliedernde Psychologie*（前學年の續き）

☆『哲學研究』334, 29-1, p.82は、それまでの号が「年度」として表示していたのと変わって、上の期間を表示している。しかもこの号（29-1）の発行は昭和19年1月であって、掲載時期も遅れている。なお、これ以降『哲學研究』には講義題目の記載がなくなる模様。『哲學研究』の刊行自体が第29巻は合併号を設けるなど不定期となり、昭和20年度途中にはついに一年休刊のやむなきに至っている。講義題目の記載が次に見えるのは昭和21年9月5日発行の第350号、第30巻第5冊のp.63であって、それはすでに昭和21年度分（木村の没後）であり、「下程講師」（下程勇吉氏）ほかの名が挙がっている。

1944(昭和19)年〔7月8日、心理学講座担任を辞す〕

＊この年の講義については、不詳。

戦時体制下の学徒勤労動員と学徒出陣のため、大学の講義そのものが次第に実施困難になっていった。在



学年限の短縮すなわち繰上げ卒業は、昭和16年度は3カ月、昭和17年度から6カ月。(入学についても、昭和17年度からは10月入学も施行。)昭和18年10月には学生の徴兵猶予が停止され、昭和19年1月からは徴兵年齢が19歳に引下げられた。昭和20年度にはついに4月1日から1年間、国民学校初等科を除く全ての学校において授業が完全に停止された。([『京都大学百年史 総説編』(叻京都大学後援会、1998(平成10)年6月18日、pp.436-437, pp.445-457, p.456, p.1129を参照。)

## Ⅵ 木村素衛に関するもの (事典の類は省く)

### 1. 単行本

張さつき<sup>ちよう</sup>『父・木村素衛からの贈りもの』未来社、1985(昭和60)年1月25日。

序として、下村寅太郎「本書に寄せて」(昭和五十九年十一月記)。

東 薫<sup>ひがし かおる</sup>『わが師 木村素衛』南窓社、1990(平成2)年1月31日。

木村素衛先生50回忌記念刊行会編『木村素衛先生と信州』信濃教育会出版部、

1996(平成8)年12月5日。(本目録(上)において既述)

村瀬裕也<sup>ひろや</sup>『木村素衛の哲学——美と教養への啓示』こぶし書房、2001(平成13)年12月15日。

#### [木村素衛への言及を含むもの]

鈴木藤太郎<sup>とう</sup>「木村素衛先生」『改訂 子供記』甲文社、1948(昭和23)年10月15日。pp.313-322。(本目録Ⅲに既出の書物)

藤村 作監修、西尾 實・近藤忠義共編『現代文学総説Ⅲ 現代思想研究篇』學燈社、1952(昭和27)年4月10日。pp.197-199。

糸賀一雄「友垣——近江学園前史——」の「2 二人の恩師」のうち「木村素衛教授」

『この子らを世の光に (自伝・) 近江学園二十年の願い』柏樹社、1965(昭和40)年11月1日。pp.44-48。

糸賀一雄著作集刊行会編『糸賀一雄著作集 I』日本放送出版協会、1982(昭和57)年4月1日。pp.35-37。(『父・木村素衛からの贈りもの』p.145を参照)

永杉喜輔『親と子のための論語』しなの出版、1968(昭和43)年5月30日。pp.~~~~。

(『父・木村素衛からの贈りもの』pp.115-116を参照)(筆者は未見)

糸賀一雄「施設における人間関係」1968(昭和43)年9月17日、滋賀県児童福祉施設等新任職員研修会講義(文字通り、最期の講義)において言及。

『愛と共感の教育 最期の講義』柏樹社[まみず新書19]、1969(昭和44)年1月15日。

(永杉喜輔・野上芳彦編)『〔精薄兄の父 糸賀一雄講話集〕愛と共感の教育 増補版』柏樹社[柏樹新書11]、1972(昭和47)年12月25日。pp.42-43。\*( )内の文字は、奥付には記載のないもの。

糸賀一雄著作集刊行会編『糸賀一雄著作集 Ⅲ』日本放送出版協会、1983(昭和58)年6月20日。p.473。(『父・木村素衛からの贈りもの』pp.135-136およびp.142を参照)

下村寅太郎「木村素衛」『遭逢の人』南窓社、1970(昭和45)年3月31日。pp.180-191。

☆これは「Ⅰ 追悼」「Ⅱ『表現愛』」「Ⅲ」から成る。Ⅱ・Ⅲの末尾にはそれぞれ(「表現愛再刊の序」)

（『教育愛と表現愛」序）と付記されている。Ⅰは、もと『信濃教育』第717号（1946(昭和21)年9月）に掲載された「追憶」という文章（後掲）に推敲が加えられたもの。但し、「『國家に於ける文化と教育』は故人の教育學の體系を示す最後の著作となつたが、…」という元の文章の「體系」という語が「基礎」に改められている（p.183）。この点は、木村素衛の主著の評価・位置づけに関わる変更点であり、見過ごすことはできない。Ⅱの初出については、筆者は未確認（南窓社版『表現愛』にはこの文章は無い。岩波書店より再刊されたことがあって（ひょっとすれば、1949(昭和24)年）、その際に添えられたものか？）。Ⅲは、信濃教育会からの『表現愛と教育愛』（1965(昭和40)年4月）（前掲）の序である。Ⅰと同様、推敲を経ているが、ここでもまた、「重厚で壮大な思想体系の基礎が形成された」と改められている（p.189）。

三浦 了「木村素衛先生と糸賀先生」糸賀記念会・糸賀一雄先生追想集編纂委員会（代表 永杉喜輔 田村一二）編『追想集 糸賀一雄』柏樹社，1970(昭和45)年9月18日。pp.242-243.

糸賀記念会編『追想集 糸賀一雄』大空社〔伝記叢書67〕，1989(平成元)年7月8日。  
pp.242-243. \*本書は、上記の書物の復刻版である。

高坂正顕「木村素衛君のこと」『追憶と願望の間に生きて 遺稿集』読売新聞社，1970(昭和45)年12月25日。pp.98-100. (井口p.25も参照)

また、『高坂正顕著作集』第6巻，理想社，1970(昭和45)年8月20日に所収の、高坂正顕「著作集第六巻について」（あとがきにあたる文章。昭和44年10月）にも、木村素衛に関する記述がある（pp.336-337）。ただし、「同期の友人木村素衛君に、教育学の助教授の話が起こったこと」を「昭和十四・五年頃であったと思う」とし、記憶が事実と齟齬をきたしている。

相原信作「師弟」下村寅太郎編『西田幾多郎—同時代の記録—』岩波書店，1971(昭和46)年12月18日。pp.142-146. その他、木村素衛の名前だけならば同書に散見される。この書物は『西田幾多郎全集』初版・再版に附録された月報に所載の文章をまとめたもの（奥付に副題はない）。相原氏のこの文章の初出は1965(昭和40)年4月の月報。海後宗臣・波多野完治・宮原誠一監修，稲垣忠彦編『近代日本教育論集 第8巻 教育学説の系譜』国土社，1972(昭和47)年4月5日。

本書は『表現愛』の「第二部 表現愛の構造」（全五節のうち「三」まで）を収録している（pp.153-164）が、巻頭に稲垣忠彦による「解説 教育学説の系譜」を置き（木村素衛への言及は、p.11, p.27, p.35）、上記の抄録の前に横須賀薫による解説文を掲載している（「木村素衛 表現愛（抄）」：p.152）。

上田 薫「帰国」および「恩師」

「続林間抄」として『層雲 教育についてのエッセイ』黎明書房，1973(昭和48)年12月28日に所収。p.154, p.242.

『上田薫著作集12 教師と授業・続林間抄』黎明書房，1993(平成5)年11月25日。  
p.190, pp.254-255.

上田 薫「挫折」

「続々林間抄」として『みずからを変える力』黎明書房, 1977(昭和52)年に所収。

(著作集11の後記pp.270-271による。筆者は未確認)

『上田薫著作集11 林間抄』黎明書房, 1992(平成4)年10月1日。p.257.

長谷山八郎『守られて生きる』こころの手帖社, 1978(昭和53)年5月。

(『父・木村素衛からの贈りもの』p.136およびp.142を参照)(筆者は未見)

吉岡正幸『教育の内側から』ぎょうせい, 1986(昭和61)年8月30日。(筆者は未見)

もと『信濃教育』864号(昭和33年11月)に掲載の「追憶」という文章, および  
同1169号(昭和59年4月)の「編集余録」の二篇を整理して収めたもの。

後藤三郎『孤糧・信濃路の手記——若き戦没学徒の遺稿——』(株)国際評論社出版事業部, 1995(平成7)年9月15日。

(日記「信濃路の手記」の部分の) pp.167-168, pp.172-173, p.250, p.262, p.280.

上田閑照<sup>しずてる</sup>『西田幾多郎 人間の生涯ということ』岩波書店[同時代ライブラリー243], 1995(平成7)年11月15日。(ただし、奥付には副題は記されていない。) p.155, pp.179-180. またp.214  
には西田幾多郎との写真が掲載されている。

京極高宣<sup>たかのぶ</sup>「二人の恩師の影響——特に木村教授からの影響」『この子らを世の光に 糸賀一雄の思想と生涯』日本放送出版協会, 2001(平成13)年2月25日。pp.146-152. なお,  
p.24, 78, 89, 91, 92, 102, 196も参照。

※ 木村素衛の著作からの引用文が数点織り込まれているが、誤字・脱字が惜しまれる。

大橋良介『京都学派と日本海軍 新史料「大島メモ」をめぐって』PHP研究所[PHP新書185], 2001(平成13)年12月28日。

京都学派の秘密会合(昭和17年2月12日~18年11月2日, 計18(?)回におよぶ)  
の大島康正による筆記(大島メモ)を中心に, 当時の日本海軍と京都学派との関係  
を記述したものであるが, 会合の常連の一人として木村素衛の名前が見え, そ  
の発言が記録されている(p.175, 180, 185, 189, 199, 200, 201, 202, 272,  
321, 337)。とくに第11回会合(昭和17年12月9日)では, 「木村教授満支旅行報  
告」を受けての「支那問題検討会」が行なわれたとのこと(pp.251-267)。

※なお, 山口昌男『「挫折」の昭和史』岩波書店, 1995(平成7)年3月24日, p.22には,

「西田学派に属したこの哲学者は, たしか昭和二十三年ころ, 夫人もろともお手伝いさんを虐待したと  
訴えられ新聞ざたになったことがある。この一件は本論に関係ないが気になるところだ。」とあるが,  
事実無根である。(木村素衛は昭和21年2月12日に没している。)

その他, 『京都帝國大學史』京都帝國大學, 1943(昭和18)年12月20日。

p.651, p.652, および年譜のp.796, p.802.

『京都大學文學部五十年史』京都大學文學部, 1956(昭和31)年11月23日。

pp.270-271(「教育學教授法講座」の項)。なお, 附録の「學位受領者表」の「新學位令

による文學博士（大正九年七月五日公布勅令第二〇號によるもの）」のなかに「昭和一五・三・一三 實踐的存在の基礎構造 石川 木村素衛」という記載がある（p.419）。

京都大学七十年史編集委員会編『京都大学七十年史』京都大学，1967(昭和42)年11月3日。  
pp.337-338(「教育学部の源流」の項)，およびp.1163, p.1247(初代の学生部長としての記載)。  
京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 部局史編1』(財京都大学後援会，1997(平成9)  
年9月30日。p.184。  
京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 総説編』(財京都大学後援会，1998(平成10)年6  
月18日。p.452, p.461, p.507, p.508, p.1099, p.1135。

## 2. 研究論文・雑誌記事

高橋俊乗「故木村教授を悼む」

『教育學研究』第14卷第1号，1946(昭和21)年10月1日。(pp.56-58)

\* 刊行年月日は、日本教育学会に問合せた。(文生書院からの復刻版によっては、特定できない。)

三浦<sup>ひろきち</sup>広吉「木村美学に於ける『理念』に就いて」

(京都大学教育学部同窓会名簿によれば、お名前の文字は「廣吉」である。)

北九州大學學術委員會『北九州大學論文集』第二輯（昭和27年度分），1953（昭和28）年4月。

前田 博「木村素衛教授の生涯と業績」

『京都大学教育学部紀要』Ⅳ（昭和32年度分） 特集 五人の教育学者—その生涯と業績—，1958（昭和33）年3月。

鈴木重信「三人の師」

(木村明彦氏による。筆者は未見)

神奈川県教育センター所報『教育と文化』1967(昭和42)年第2号, 1967(昭和42)年 月。

鈴木重信「                    」

『いづみ』第7号 (『日本教育新聞』京都版, 1992(平成4)年1月11日を参照。筆者は未見)

藤原英夫「教育学専攻者の回想あれこれ」

『京都大学教育学部同窓会会報』第3号，1974(昭和49)年5月15日。

(『父・木村素衛からの贈りもの』 p.116を参照)

大西正倫<sup>まごみち</sup>「木村素衛における『形成・表現』について——木村教育学の研究Ⅰ——」

『京都大学教育学部紀要』第32号（昭和60年度分），1986（昭和61）年3月。

いとう 夷藤 保「木村素衛先生の人と学」

『金沢大学大学教育開放センター紀要』第7号，1987(昭和62)年3月。

あじさかつぎ お  
鯨坂二夫「日本の教育と京都大学」（「揺籃期の京都大学——創立90周年記念展」記念講演，昭和62年11月19日）

京都大学附属図書館報『静脩』通巻87号, 1988(昭和63)年2月29日。

郷田 豊「木村素衛年譜」

『金苗恭博教育科学教育60年』1990(平成2)年2月11日。

郷田 豊「木村素衛と信州」

『九州女子大学紀要』第25巻第1号—1989—, 1990(平成2)年3月。

藤田正勝「木村素衛とフィヒテ」

フィヒテ研究編集委員会編『フィヒテ研究』第2号, 日本フィヒテ協会発行, 晃洋書房発売,  
1994(平成6)年11月。

\* 日本フィヒテ協会第9回大会(1993年11月28日)シンポジウム「日本におけるフィヒテ研究」における発表(後掲)を纏め直した論文。なお, 同誌に掲載の渡邊二郎「シンポジウムの意義と問題点」も参照。

水崎富美<sup>み</sup>「木村素衛の人間学の構造——木村教育学の特質——」

『東京大学教育学部紀要』第34巻(1994), 1995(平成7)年3月。

水崎富美「木村素衛教育論における『関係概念』と〈ポイエシス〉——三木清との比較をととして——」

『研究室紀要』第21号, 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室, 1995(平成7)年7月。

大西正倫「木村素衛における国民教育論の構造」

和田修二編『教育的日常の再構築』玉川大学出版部, 1996(平成8)年3月。

大西正倫「木村素衛における表現的世界の構造」

『哲學論集』第43号, 大谷大学哲学会, 1997(平成9)年3月。

大西正倫「木村素衛——実践における救いの教育人間学」

皇 紀夫・矢野智司編『日本の教育人間学』玉川大学出版部, 1999(平成11)年11月。

大西正倫「コンテクストから読み解く——木村素衛と『身体と精神』」

藤田正勝編『京都学派の哲学』昭和堂, 2001(平成13)年7月。

大西正倫「木村素衛における『表現愛』の構造」

山崎高哉編『応答する教育哲学』ナカニシヤ出版, 2003(平成15)年3月。

大西正倫「木村素衛に関する文献・資料目録(上)」

『佛教大学教育学部論集』第15号, 2004(平成16)年3月。

その他, 修士論文(非刊行物)として

大西正倫「木村素衛における教育愛の構造」

京都大学大学院教育学研究科 昭和58年度修士論文 1984(昭和59)年1月。

鶴本順子「木村素衛における教育学的思惟の形成——文化と教育の関係をめぐって——」

鳴門教育大学大学院 平成3年度修士論文 1992(平成4)年1月。

水崎富美「藝術と人間形成——木村素衛の音楽論的展開」

東京大学大学院教育学研究科 平成4年度修士論文 1993(平成5)年3月。

また、秋山 仁「教育は仁術 26 体罰に頼る教師たちよドイツのやり方に学べ」

『週刊朝日』1995(平成7)年8月11日号が、木村素衛の権威論にふれている。

『信濃教育』（大日本教育會長野縣支部／信濃教育会）に掲載されたもの

711号，昭和21年3月 「木村素衛先生終焉の記」 上小哲學會委員

（目次では「素衛」の文字がぬけている。）

713号，昭和21年5月 「木村先生をお送りして」 鶴田 正

717号，昭和21年9月 （この号は、いわば〈木村素衛先生追悼特集号〉である。）

「木村君との交友」 高坂正顯

「追憶」 下村寅太郎

「木村君の思ひ出」 高山岩男

「父の追憶」 木村明彦

「教育愛」 小田 武

「木村君と筆」 高坂正顯

「木村先生の書簡から」 三村正文

「木村素衛先生」 太田美明

「木村先生」 下島 節

「木村先生」 磯川準一

「木村素衛先生を憶ふ」 井口東穂

「追憶斷章」 中山兼徳

「御高恩の数々」 坂井吉満（目次の「酒井」は誤り）

「木村先生」 柄山岩雄

「木村先生追悼法要竝に座談會」

862号，昭和33年9月 木村素衛先生をしのんで（一）

「木村素衛先生の十三周忌に当りて」 鶴田 正

「エロスとアガペ（上）——木村先生の教育愛について——」 太田美明

864号，昭和33年11月 木村素衛先生をしのんで（二）

「エロスとアガペ（下）——木村先生の教育愛について——」 太田美明

「一つの手紙」 井口東穂

「追憶」 吉岡正幸

「木曾路の木村先生」 磯川準一

966号，昭和42年5月 「木村素衛先生を想う」 鈴木重信

967号，昭和42年6月 「表現愛ノート」 鈴木重信

974号，昭和43年1月 話の広場

- 「二十三回忌法要に参じて木村素衛先生を思う」 田中繁雄
- 1004号, 昭和45年7月 特集 家庭教育〈私の受けた家庭教育〉
- 「愛情の奥のきびしさ」 木村明彦
- 1054号, 昭和49年9月 「木村素衛先生私記」 井口束穂
- 1109号, 昭和54年4月 「教師の行為的自覚」 太田美明
- 1159号, 昭和58年6月 読書に思う『花と死と運命』を読んで
- 「私は、真に真面目にならなければならない」 曾根原方教
- 「『死』の实在に生きる」 川上金利
- 「『花と死と運命』読み合わせ会から」 中村竹雄
- 「『花と死と運命』」 市川武重
- 「『私を包むもの』への感謝」 林 耕史
- 「『魂の静かなる時に』を読んで」 宮坂利江
- 「『夕映』」 若林輝光
- 1169号, 昭和59年4月 「『花と死と運命』——補遺と手紙——
- 木村素衛先生を偲んで——」 鈴木重信
- 「編集余録」 吉岡正幸
- 1206号, 昭和62年5月 「木村素衛先生のこと」 竹内史人
- 1285号, 平成5年12月 「木村素衛の『学位論文』と『信濃教育会』資料」 日野信和
- 1305号, 平成7年8月 木村素衛先生に学ぶ
- 「机の履歴書」(木村素衛先生没後五十回忌記念講演) 高坂正堯
- 「悲しみを見つめるまなざし——木村素衛先生にまつわること」 小林茂喜
- 「私の木村素衛先生」 深澤幸江
- 「木村素衛先生を学ぶ——『父・木村素衛からの贈りもの』を通して」 宮坂昭吉
- 「中部小学校と木村素衛先生」 堀内修治
- 「木村素衛先生と松本市教育会」 宇治橋克彦
- 木村素衛入信年譜 教育博物館 大隅泰男 作成

『上小教育』No86 (上田小県教育会), 1967(昭和42)年3月10日に掲載されたもの

(巻頭言) 「木村素衛先生をおもう」 会長 宮下哲之助

木村素衛先生記念碑除幕式記念講演 「美について」 東京学芸大学学長 高坂正顕

その他, 『慈愛と信頼』p.107の参考文献一覧表にあるように, 信濃教育会および信濃哲学学会あるいはそれらの地域部会などの発行した種々の刊行物に木村素衛に関する記載があるものと考えられる。郷田氏による年譜p.11および郷田論文p.66, p.73も参照。



### 3. 学会における研究発表

大西正倫「木村素衛による〈表現としての教育〉」

教育哲学会第29回大会，1986(昭和61)年10月19日，於千葉大学。

水崎富美「木村素衛の教育論の根本原理に関する一考察

——藝術および美学的観点から教育の原理を考えるために——」

教育哲学会第36回大会，1993(平成5)年10月13日，於愛媛大学。

藤田正勝「木村素衛とフィヒテ」

日本フィヒテ協会第9回大会 シンポジウム「日本におけるフィヒテ研究」

1993(平成5)年11月28日，於東京大学。

水崎富美「音楽的教育原理論の研究——木村素衛を手がかりとして——」

日本音楽教育学会第26回大会，1995(平成7)年9月30日，於愛媛大学。

大西正倫「日本の教育哲学——木村素衛の場合」

大谷学会研究発表会（第70回），1998(平成10)年10月23日，於大谷大学。

### 4. 講演

張さつき氏による 多数の講演がある。

大西正倫「木村素衛：京都学派の教育哲学」

第6回日本哲学史フォーラム，2003(平成15)年9月27日，於京都大学。

### 5. 書評

三木 清「木村素衛著『國民と教養』」

『東京朝日新聞』1939(昭和14)年12月3日。

『三木清全集』第19巻，岩波書店，1968(昭和43)年5月24日。pp.726-727.

森 昭「歴史的生命的教育哲学 ——故木村素衛博士著『國家に於ける文化と教育』——」

\* 末尾に「(一九四六，十，十)」と脱稿日が付記されている。

『教育學研究』第15巻第1号，1947(昭和22)年4月1日。pp.65-68.

\* 刊行年月日は，日本教育学会に問合せた。(文生書院からの復刻版によっては，特定できない。)

### 6. 小冊子

『追慕』発行責任者 新井 保，1958(昭和33)年12月25日。

\* 扉に「故 木村素衛先生十三回忌記念」とある冊子。

下村寅太郎・蜂屋 慶両氏の講演（校閲済み）と小田 武氏の論文を収録。

『安曇野と木村素衛先生』南安曇郡教育会，1969(昭和44)年6月1日。（筆者は未見）

『木村素衛先生遺講 戦後の教育について』南安曇郡教育会，1969(昭和44)年6月1日。

- \*『恩師への追慕』からの抜刷。昭和20年9月19日、大町国民学校での講演。  
『邂逅——木村素衛先生と私——』郷田 豊, 1971(昭和46)年5月10日。\* (筆者は未見)  
『木村素衛の碑のこと』山下久男, 1971(昭和46)年5月22日。 (筆者は未見)  
『木村素衛先生をたずねて』郷田 豊, 1971(昭和46)年10月2日。\* (筆者は未見)  
『風止まず』東 薫, 1981(昭和56)年8月。([父・木村素衛からの贈りもの] p.164を参照) (筆者は未見)  
『楓葉丹』鶴田 正, 蔦友印刷, 1990(平成2)年11月18日。 (筆者は未見)  
『生かされて』吉岡正幸, 信教印刷, 1990(平成2)年11月20日。 (筆者は未見)  
『出会いこの道』中山清文, ほおずき書籍, 1991(平成3)年12月6日。 (筆者は未見)  
『梓川のほとりで』太田美明, 信教印刷, 1996(平成8)年10月20日。 (筆者は未見)  
※この項, 『慈愛と信頼』p.107, 『木村素衛先生と信州』p.134, および郷田論文pp.65-66を参照。\*印は, 郷田年譜によれば昭和48年。

## 7. 新聞記事

- 「京都の教育の源流性『木村素衛先生』のこと」  
『日本教育新聞』京都版, 1992(平成4)年1月11日。  
「京都の教育の源流性 余話」  
『日本教育新聞』京都版, 1992(平成4)年3月14日。

## 8. テレビ番組

- 「教育者 木村素衛への旅」NHK教育 (ETV2002), 2002(平成14)年12月4日放送。

## 9. その他 (書物の紹介・書評など)

- 張さつき著『父・木村素衛からの贈りもの』に関するもの  
藤原英夫「夭折の教育哲学者の生涯 張さつき著『父・木村素衛からの贈りもの』」  
日本文化会議『文化会議』第193号, 1985(昭和60)年7月1日。  
道谷一朗「書評 父・木村素衛からの贈りもの」  
京大生協綴葉編集委員会『綴葉』No50, 1985(昭和60)年7月15日。  
☆執筆者「道谷一朗」は教育学研究科(大学院)所属とされているが, 該当者はなく, 仮名(筆名)であろう。  
「張さつき小特集」中込忠三・志村ふくみ・水波 博・原野榮二・張さつき  
原野榮二発行『雲』第34号, 1985(昭和60)年9月30日。

- 東 薫著『わが師 木村素衛』に関するもの  
(著書を語る 123) 東 薫『わが師 木村素衛』を書いて」

ジュンク堂書店『書標 ほんのしるべ』第138号，1990(平成2)年3月5日。

こぶし書房版『表現愛』に関するもの

山崎高哉「教育学の再構築のために——『表現愛』の復刊を慶ぶ——」

村瀬裕也「木村素衛『表現愛』の復活」

大西正倫「われわれの中に木村素衛を呼び起こせ」

張さつき「母のあとがきより」

こぶし書房『UTPĀDA 場』No10，1997(平成9)年9月20日。

こぶし書房版『美の形成』に関するもの

山住正己「新編集『美の形成』を読む」

毛利 猛「木村素衛と教育学」

渡辺かよ子「美と教養（＝人間形成）をつなぐ先駆的遺産」

水崎富美「木村素衛の人間への問いと人間形成」

こぶし書房『UTPĀDA 場』No15，2000(平成12)年7月10日。

以上

〔訂正〕

本目録(上)に『草刈籠』とあります（『佛教大学教育学部論集』第15号，p.142，p.145に4箇所，p.146に2箇所，p.152，p.153，p.154，p.155）が，すべて，誤記でした。

正しくは『草刈籠』です。お詫びして訂正させていただきます。

（おおにし まさみち 教育学科）

2004年10月15日受理